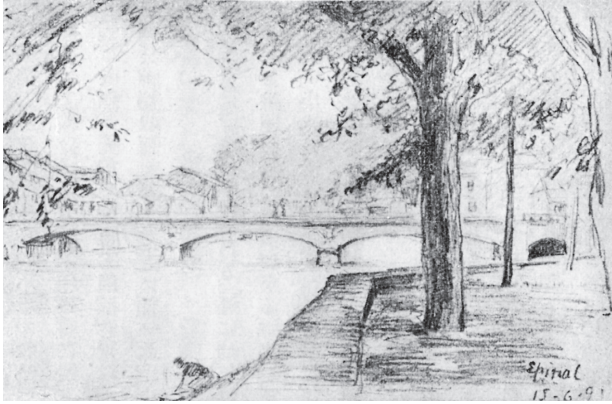


獨佛國境旅行日記拔書



黒田清輝

明治二十四年六月十二日
久米と二人でヴォジュを指し
て出掛け十五日エピナルに着
く此處には兵營などが在つて
一寸繁昌なり河岸の公園地は
夕涼みに最も適當と思はる



十六日 エピナルより東は地勢が變つて高低が次第々々に多く所々に溪流が見えるサンゼエの町を見物してから山へ登る此時俄かに雨が降り出したので二人とも早速用意の雨合羽を着る折角巴里で買つて來た此合羽を其儘持つて歸つては残念だと思つて居たのだがとう／＼今日始めて濡らして安心した

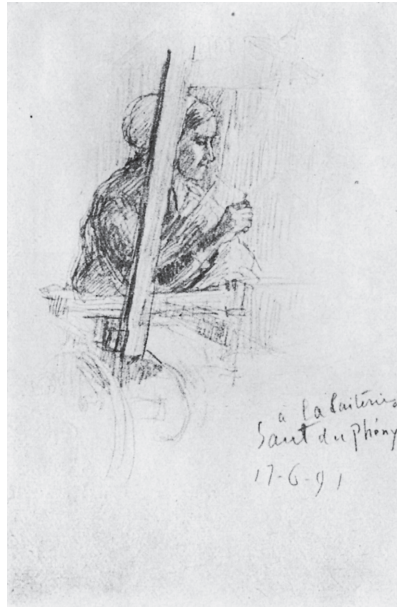


十七日

昨夜ゼラルメに着いて湖畔の
一寸氣取つた小薩張としたホ
テルに泊る今朝九時過にホテ
ルを出て湖の右岸を廻り向ふ
側に出る



メレルと云ふ瀧を見て山路
を上り下りして一時頃に谷
川の縁の樹陰の涼しい處で
辨當を使ふ



夫れからフェ
ニ―瀧を見て
其近所の百姓
家に立ち寄り
牛乳を飲み又
山路をたどつ
てクルーズ・グ
ートの瀧へ行
く此日九時過
ゼラルメに歸
る

十九日 昨日はゼラルメを立つてシヤ
ルルマーニユの腰掛岩ソウデキュブの
瀧を見ロンジュメール湖の右岸を廻り
ルツールヌメール湖で丁度一時頃石斑^{やま}
魚料理に舌鼓を打ちホネック山の頂上
に達したのは五時頃であつた七時頃に
シュルフトといふ處に着く此處にはホ
テルが一軒ある計りで外に人家はない
今朝は八時過に立つて山づたひに進む
此邊は一體の禿山で或る處に丈の低い
枯たやうな樹木が少し許り生へて居る





山又山のうねくを見晴らして心地よし昨日のホネックが一番の高山で其高さ一千三百六十六メートル之れに次ぐタンネック山をも打越えて一時頃にラック・ブランと云ふ湖の在る所に着く此處は獨逸領で一通り憲兵から國籍職業等を糾問された



七十年の戦争以來此のホネック、タンネックの嶺の上が獨佛の國境に爲
つて居る其印はどうしてあるかと云ふに丁度花園の中の路のやうに地
面が幅三尺許り深さ二三寸に削つてあつて四五町もあるかと思ふ距離
の所毎に一里塚のやうに角な石柱が建てゝある其高さは二尺位のもの
で柱の頭即ち上へ向つた面の中央を通して一と條線が刻り付けてある
此の線が正しく獨佛の境界で又其石の兩側に東方にはF西方にはDの
字が記してある

ホネック山より此方は此境界線が通路であるラック・ブラ
ンで晝餉を済ませて又佛領へ入り森の中を通りルリュド
ランの瀧へ廻る

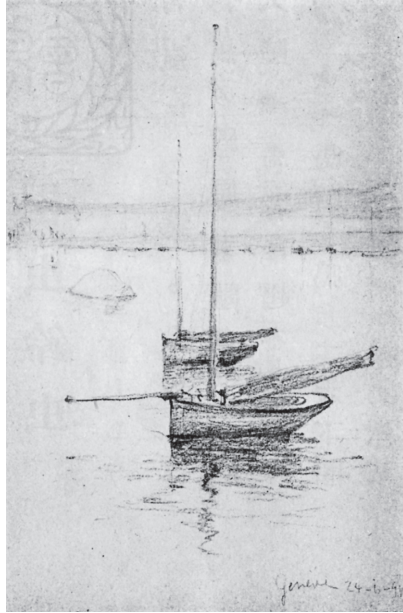




六時半頃ルリュドラン村のホ
テルに着く此家の主婦が誠に
深切で今夜は全く客中の身だ
といふ事を忘れた十時過床に
入り窓の前を流れて居る谷川
の音を聞きながら眠る

二十日 宿屋の
居心地がいゝの
と山村のいか
も静なのが氣に
入つて今夜も亦
此處に一泊す





二十一日 ルリユドランを立ち再びゼラルメへ向ふ途中で雨に遇ひ合羽を着たが腰から下はびしょ濡れになり着更を持たずに大に閉口した二十二日アルザス州に入りクリユット村に泊る是れより瑞西國へ出でバール。ジュネーヴ。ヴヴェの諸市を經二十七日朝巴里に歸り着く

『光風』二十四明治三十九年一〇月

留学中の明治三十四年六月二日から二七日まで、久米桂一郎と行った独仏国境への旅行記。『光風』掲載誌面には、その折の写生帖（現在、東京国立博物館蔵）から十二点の素描が掲載された。本書の挿図も、その掲載に従っている。洋紙十八枚に書き綴った旅行日記も伝えられるが、『黒田清輝日記』第一卷に収録）、本文献はタイトルに「拔書」とあるように、旅程にそつて日記をさらに要約したものである。